

「T2Kシンポジウム2010@東大」実施報告

大島 聡 史

東京大学情報基盤センター

2010年7月12日(月)、東京大学武田先端知ビル5階武田ホールにて、「T2Kシンポジウム2010@東大」*1 が開催された。本シンポジウムは、2008年に東京大学情報基盤センター、筑波大学計算科学研究センター、京都大学学術情報メディアセンターの3大学が共通仕様のスーパーコンピュータ「T2Kオープンスーパーコンピュータ」の調達を実施するのを機に始まったシンポジウムである。これまでに、2008年に3回、2009年に1回実施されており、今回が5回目となる。

本シンポジウムのプログラムは次ページ表1に示すとおりである。大学・研究機関関係者39名と一般企業53名の合計92名の参加者を迎えて盛会のうちに行われた。

本シンポジウムは3部構成となっている。はじめの第1部では石川裕情報基盤センター長による開催挨拶および、中島研吾教授によるT2Kオープンスパコン東大版の稼動報告と今後の動向についての説明が行われた。T2Kオープンスパコン東大版の稼動状況については本スパコンニュースでも毎号報告しているので、あわせてご覧いただきたい。

続く第2部ではeScienceプロジェクト成果報告が行われた。eScienceプロジェクトは筑波大学・東京大学・京都大学がT2Kオープンスーパーコンピュータの調達を機に共同で始めたプロジェクトであり、プロジェクト内では東京大学が2つ(単一実行環境 Xruntime, 自動チューニング機能付き数値計算ライブラリ Xabclib)、筑波大学が1つ(高性能並列プログラミング言語処理系 XscalableMP)、そして京都大学が1つ(高生産並列スクリプト言語 Xcrypt)の合計4グループで研究開発を行っている。今回の成果報告ではeScienceプロジェクトの全4グループが各々の研究開発の内容説明と最新の研究成果の発表を行った。

最後の第3部では、T2Kシンポジウム恒例のパネルディスカッションが行われた。パネリストとして3大学および日本国内においてスーパーコンピュータを製造している民間企業3社からそれぞれ若手を中心に1名ずつが登壇し、「ポストT2K時代のセンターマシン」というテーマのもと来たる100PFlops時代に向けた展望や課題についてプレゼンテーションを行った。さらに会場の聴講者からも質問を受け付け、時間いっぱいまで熱く議論を交わした。

第6回目のT2Kシンポジウムは京都大学で行われる予定である。

*1 <http://www.cc.u-tokyo.ac.jp/publication/sympo/06/>

表1 T2K シンポジウム 2010 @東大 プログラム

2010年7月12日(月) 東京大学武田先端知ビル 5階武田ホール

第1部		
13:00-13:05	ご挨拶	石川 裕 (東京大学情報基盤センター長)
13:05-13:35	T2K オープンスパコン東大版の稼動報告と今後の動向	中島 研吾 (東京大学)
第2部 eScience プロジェクト成果報告		
13:35-13:40	概要	石川裕 (東京大学)
13:40-14:00	単一実行環境 Xruntime	石川裕 (東京大学)
14:00-14:20	自動チューニング機能付き 数値計算ライブラリ Xabclib	片桐孝洋 (東京大学)
14:20-14:50	高性能並列プログラミング 言語処理系 XcalableMP	中尾昌広 (筑波大学)
14:50-15:20	高生産並列スクリプト言語 Xcrypt	平石拓 (京都大学)
15:20-15:40 休憩		
第3部 パネルディスカッション		
15:40-17:20	<p>「ポスト T2K 時代のセンターマシン」</p> <p>モデレータ: 石川 裕 (東京大学)</p> <p>パネリスト: 多田野 寛人 (筑波大学) 大島 聡史 (東京大学) 平石 拓 (京都大学) 安島 雄一郎 (富士通) 櫻井 隆雄 (日立) 菅 真樹 (NEC)</p>	